

## 貝屋へ通った子どもたち



田人町荷路夫の中居へ。三株山のてっぺんから通っていたという伝説の生徒の一人、蛭田幸子さん（旧姓・芳賀）のお宅を訪ねました。そこは美沢という集落で同級生だけでも3人いたそうですが、幸子さんの家が一番奥だったとのこと。小学校は滝ノ平の分校へ。「滝ノ平に落ちてく道は、それこそ父親たちが切り開いて切り開いて、夏は草刈ってくれて、結構子供もいだもんですから、何日も歩く道になんですね。」すごい話…。「で、中学は一番通りやすい石住を選んだんです。本当にてっぺん付近に住んでたんで、石住が貰泊が、それぞれ下って行ぎやすいどこに行きました。」仁田まで降りてきた轡路（木材を下した木馬道）は今は埋もれて辿れないとか。「行ぎは下りで走ってぐがら1時間。帰りは登りながら1時間40分くらい。」と幸子さん。校歌の思い出を訊いてみると、「歌詞にりん草があつて、山にはうんと咲いでだし摘んで歩いたりなんかしたもんがら、ああ、自分たちの校歌なんだと思ってね。そんな記憶はあります。」



前区長にも訊いたら?ということで、小沢重好さんを訪ねました。重好さんの家の石住集落で米や雑貨を扱っていた商店、当時は相当大きな商売だったんじゃないですか?「貝屋ど仁田にパチンコ屋あったですから。大体疎開しててだ人も多がったがるね。」貝屋にはなんと映画館もあり、芝居がかかることもあったそうです。校歌について訊いてみると、「卒業するどぎに出来たもんがら、あんまり覚えでないんだよね。妹はその先生が来たどぎに一緒に歩ったらしいんだげど。」ぜひお話を、と思いつたが、今は横浜に住んでらっしゃるとのこと。残念、高橋新二さんを案内した生徒として、新聞に唯一名前が載っていた小玉チヨノさんのことも訊いてみました。「チヨノは同級、いわきにいるよ。金山だったがな。今ちよっと連絡先出でこねーけど、実家は仁田だから。行ってみだら?」

## 地図上の境界線

石住集落と仁田集落は切れ目もなく続いていますが、実は仁田は古殿町。しかし昔から、仁田の子どもたちは貝屋の学校に通っていました。市境の

カーブを右に曲がって行くと、東北電力鮫川発電所が見えています。ここで発電に使われ解放された水は、すぐまた取水され、隧道を通って皿貝の日鉱金属柿ノ沢発電所へと送られます。



田人町荷路夫の中居へ。三株山のてっぺんから通っていたという伝説の生徒の一人、蛭田幸子さん（旧姓・芳賀）のお宅を訪ねました。そこは美沢という集落で同級生だけでも3人いたそうですが、幸子さんの家が一番奥だったとのこと。小学校は滝ノ平の分校へ。「滝ノ平に落ちてく道は、それこそ父親たちが切り開いて切り開いて、夏は草刈ってくれて、結構子供もいだもんですから、何日も歩く道になんですね。」すごい話…。「で、中学は一番通りやすい石住を選んだんです。本当にてっぺん付近に住んでたんで、石住が貰泊が、それぞれ下って行ぎやすいどこに行きました。」仁田まで降りてきた轡路（木材を下した木馬道）は今は埋もれて辿れないとか。「行ぎは下りで走ってぐがら1時間。帰りは登りながら1時間40分くらい。」と幸子さん。校歌の思い出を訊いてみると、「歌詞にりん草があつて、山にはうんと咲いでだし摘んで歩いたりなんかしたもんがら、ああ、自分たちの校歌なんだと思ってね。そんな記憶はあります。」

「昔は水が多くて、木も流してだし、雨なんか降っと溢れそうだった。」とみんなおっしゃいますが、その理由がここにあります。また杉山というのは保水力が弱いので、「沢だらけだった」という石住も、今は面影がありません。ここ鮫川に限ったことではありませんが、山間部の河川の環境、そしてそこに住む人々の暮らしは一変しているのです。



などと思っているとなんとバスが!石住地区には現在バスが走っておりませんが、古殿町である仁田には福島交通のバスが通っていました。市境の寸前に回転場があり、Uターンしていきます。行先は石川駅前。ちなみに昔は棚倉から石住を通って植田までの国鉄バスがあったそうです。3時間の長距離路線、磐城南線。30年以上前のお話。

## 校歌なかりし頃

小玉チヨノさんの御実家を訪ねました。お兄さんの光之助さんは昭和9年生まれ。奥様邦子さんは12年生まれ。チヨノさんの連絡先を教えて頂いてから、お二人が通っていたころのお話を伺いました。なんと、光之助さんの頃には門馬石衛先生が作ったという手作り校歌があったということです。節は「仙台の二高の応援歌がなんか」で、校歌のない子どもたちのための苦心の作だったと云います。仙台の二高というのは時代を考えると旧制二高つまり東北大でしょう。よし、スマホで検索!

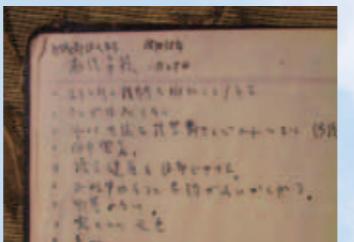


「ちがーね。…んでも二高がなんだがって云ってだな。」ということで旧制一高から校歌・応援歌・寮歌、かたっぱしから聞いてみました。そして旧制三高（京都大学）の応援歌がかかつた時のことです。光之助さんは一瞬黙り、そして歌い出しました。「白雲なびく三株山／清き流れの鮫川に／心うつして石住の／賢児学びの道達し」

光之助さんの笑顔に見入っていると、さらに、邦子さんの頃にも高木百枝先生が作ったらしい別の手作り校歌が!「二百有余の若人は、っていうのは覚えてんだげど…」なかなかそれ以上が出てこず、妹のツネ子さんに電話。すると出てくる出てくる。「剛健勤勉忠誠の／守りとなして戒める／二百有余の若人は／さながら朝日の昇るごと／元気溢るばかりなり」門馬先生や高木先生は専門家ではありません。でもその校歌はこうして、かつての子どもたちの心の中に今も生き続けています。

## あの頃が詰まつたノート

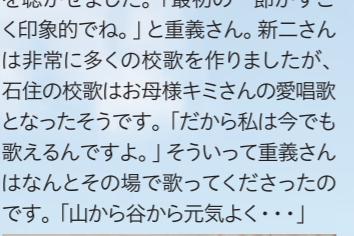
過去の新聞記事などを調べていると、作詞の高橋新二さん、作曲の紺野五郎さんともに故人であることが分かりました。残念。しかし、高橋新二さんが石住を視察した際の創作ノートが、息子さんの手元に残っているとの情報を入手。あの手この手で消息を辿り、現在福島市内に住むと云う高橋重義さんと連絡がつきました。



福島まで押しかけ、さっそくノートを見せて頂きました。石城郡田人村石住小中学校。日付は昭和38年1月25日です。「外から生徒を授業料なしで入れておく」には大爆笑。これは良一さんが言っていた、北風をさけて石住にきちゃった子どもたちのことでしょう。その他には「霞のため七色」「二時半になると太陽が山にかかる」など。



重義さんは、新二さんが寄贈式から帰ってきたときのことをよく覚えているといいます。非常に興奮しており、家族を集めて、録音してきたカセットテープを聴かせました。「最初の一節がすごく印象的でね。」と重義さん。新二さんは非常に多くの校歌を作りましたが、石住の校歌はお母様キミさんの愛唱歌となったそうです。「だから私は今でも歌えるんですよ。」そういう重義さんはなんとその場で歌ってくださったのです。「山から谷から元気よく…」



「山から谷から元気よく／貝屋へ通うよい子ども／あかるい窓が迎えてる／なかよい友が待っている／田人石住みんなの学校／氣だくやさしくほほえんで／すくすくのびるにりん草／湯殿の森は反響して／希望を胸によせてくる／田人石住みんなの学校／鮫川御斎所山ざくら／励み教えるこの故郷／霞の道を踏み慣れて／今日もよろこびひろげて／田人石住みんなの学校」

「校歌は作んないって云つてたんだです。依頼あっても、私は詩人なんで、って断つてだ。」しかしこのプロジェクトの意図を聞き、新二さんは重い腰を上げました。いざ石住に出向いてみると、故郷「靈山」の景色が重なったといいます。そうしてこの校歌は誕生しました。

## みんなの校歌できる



田辺チヨノさん  
新二さんを案内したという当時の生徒会長、田辺チヨノ（旧姓・小玉）さんを訪ねました。「ジープに乗って歩ったの。御斎所がら発電所までね。」当時の新聞記事はチヨノさんもコピーを持っています。「いやいやあだし半纏着てんだもん、かっこ悪いよね、男の子はツメ襟着てんのに、あだし半纏着てたんだね、ガッコに。あはは。」

基本的な説明は宗像校長先生が行い、質問されれば答えたそうです。「寄贈式の時には二つある教室を抜いで、机並べで、畳敷いで、そして舞台つくったの。」みんなで蕨を探り、それを買った金で記念品を贈ったそうです。いろんな話を伺ったあとで、チヨノさんは校歌を口ずさんでくれました。それは一瞬で周りの空気が変わるように、ゆったりとおおらかな調子でした。



3月20日、土砂降りの中、石住小中学校の閉校式が執り行われました。学校行事として歌われる歌はこれが最後ですが、これからも地域で歌い継がれていくことでしょう。石住小中学校はその歌詞にあるように、まぎれもなく、「みんなの学校」なのです。もう全文を掲載しないわけにはいきません。これが、石住小中学校の校歌です。

山から谷から元気よく  
貝屋へ通うよい子ども  
あかるい窓が迎えてる  
なかよい友が待っている  
田人石住みんなの学校

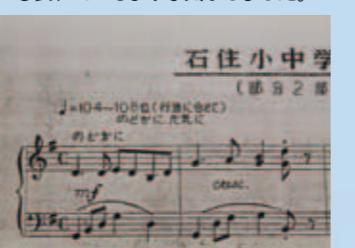
気だくやさしくほほえんで  
すくすくのびるにりん草  
湯殿の森は反響して  
希望を胸によせてくる  
田人石住みんなの学校  
鮫川御斎所山ざくら  
励み教えるこの故郷  
霞の道を踏み慣れて  
今日もよろこびひろげて  
田人石住みんなの学校



閉校記念誌を頂きました。想いのこもった素晴らしい冊子です。田人村立石住小中学校となった昭和26年から閉校までの、全卒業生の名簿が掲載されています。校歌が寄贈された昭和38年3月、卒業間近の中学生3年生に小玉チヨノさん、小沢重好さん、2年生に大竹保男さん、芳賀幸子さん、そして小学6年生には大沢良一さんいました。

## かすみの道を踏んで

チヨノさんから頂いたガリ版刷りの譜面のコピー。ぼんやりと眺めていると冒頭の指示「J=104~108 行進にあわせて」が気になりました。104~108とはどれくらいの早さなのでしょう。メトロノームを借りてきて鳴らしてみると、それは録音の時よりもずいぶん遅く、果たしてそれはチヨノさんが歌ってくれたようなゆったりしたテンポだったのです。歩きながら口ずさむには昔の歌謡曲の方がしっくりくる、と思うことがあります。それは人間の移動の速度に関係があるのかもしれません。車がなければ暮らせないような時代には、それに心地よい歌の速度があるでしょう。歩くのが当たり前だった時代には、歩くのなんてなんでもなかった時代には、それに寄り添ったテンポがあったはずです。ささいなことですが、御斎所街道の長い歴史がこんなところにも表れているような気がしました。



山から谷から元気よく  
貝屋へ通うよい子ども  
あかるい窓が迎えてる  
なかよい友が待っている  
田人石住みんなの学校

気だくやさしくほほえんで  
すくすくのびるにりん草  
湯殿の森は反響して  
希望を胸によせてくる  
田人石住みんなの学校  
鮫川御斎所山ざくら  
励み教えるこの故郷  
霞の道を踏み慣れて  
今日もよろこびひろげて  
田人石住みんなの学校

## みみたすレシピ No.7 石住篇

# 生芋合せ蒟蒻の白和え



閉校式前夜、小沢重好さん宅を訪れた際に、ふと蒟蒻の話になりました。昨年末に亡くなったお母さまが、よく白和えを作ってくれたそうです。ぜひそれをレシピに、とお願いしてみたところ、「ちょうど蒟蒻あるがら、いいよ。」さすがかつての大産地。近所のみちゃんが生芋合わせで作ってくれた蒟蒻がまだたくさんあるとのこと。「なんでお父さんこの忙しいときに…やるの私だもの…」と奥様の信代さん。すみません…。と云いながら、日を改めまして本当に忙しい最中、小沢家総出で作って頂きました!



## 材料

- 生芋合わせ蒟蒻
- 木綿豆腐
- 人参
- お好みでリンゴなど
- 砂糖、塩、醤油、ごま油

こちらは重好さんの妹さん、真弓さん。お彼岸で帰省されました。高橋新二さんが来たときに案内した5人のうちの1人です。「この裏の方も歩いてね、にりん草の話なんかしたのね。」にりん草は結局、2番の歌詞に入っています。横浜では、小学校の先生をされていたそうです。



一番のポイントは摺り具合。ミニが休んでお茶を飲んでる間も皆さん交代で延々と摺られてました…。かなり絞った豆腐を丹精込めて摺りあげて、なんとも滑らか、ねつとりとコクのある、絶品白和えです。

